

振り返って
みましょう

チームを円滑に機能させるためのチェックリスト

職員全員がチームとして機能するためには、一人一人の教職員の意識がとても大切になってきます。誰か一人の意識が欠けていてもチームとしての機能が大きく妨げられます。チームとして機能するために大切な視点をまとめました。

1 チームの雰囲気、信頼関係を高めるために

- 校内で明るい表情で過ごすよう努めていますか。
- 同僚に自ら進んであいさつをしていますか。
- 「ありがとう」「助かりました」の言葉をよく使っていますか。
- 「ごめんなさい」「間違っていました」が素直に言えていますか。
- 気になる子供の情報共有を日常の会話の中で行えていますか。

2 チームで支援していくために

- 学年や学校全体の子供を見るという意識をもっていますか。
- 子供のちょっとした変化など、良い面の情報も共有していますか。
- 生徒指導部会等、会議で検討された内容を確実に伝えようと努めていますか。
- 適応指導教室に通っている子供などへの対応について、関係機関や一部の教職員に丸投げにせず、積極的にかかわろうとしていますか。
- 子供の可能性、良さを認めるプラス思考の発言をしていますか。



【平成26年3月】

愛知県生徒指導サポート協議会
愛知県教育委員会

愛知県教育委員会「生徒指導リーフ」NO.2

“学校全体で”を意識した生徒指導を展開しよう

問題行動等が多様化、複雑化する中で、教師が一人で問題を抱え込み、対応に苦慮しているような状況は好ましくありません。生徒指導が効果的に機能するためには、“学校全体で”を意識して指導に当たる教師の姿勢が大切です。「学校はチーム」の意識をもち、チームで対応する生徒指導体制を確立しましょう。

チームで取り組む生徒指導の三つのキーワード

チームで 見る

子供の小さなサインを見逃さないために、日頃から子供の言葉、行動、表情等、観察のポイントをすべての教職員で共有することが基本となります。教職員が一つのチームとして、それぞれの目線でとらえた情報を共有することで、子供たちをより多面的に深く理解することができます。

チームで 関わる

子供たちの問題行動に迅速かつ適切に対応するためには、チームとして対応のねらい、方法を明確にし、同じ意識をもって取り組むことが大切です。教職員一人一人が、チームの一員としての自覚をもち、研修に取り組んだり、必要に応じてSC^{※1}やSSW^{※2}をチームに加え、子供に関わっていくことが問題行動等の早期解消につながります。

チームで つなぐ

子供同士はもとより、親や教師をはじめとする身近な大人など、人との関わりを通して子供たちは成長します。教職員がそれぞれの立場から子供同士、子供と周りの大人たちを意図的につなぐことは、子供たちの自己有用感を高め、問題行動等の未然防止につながります。

整える

すべての教職員が「学校全体で」を意識し、チームで生徒指導に取り組むことは、学校のもつ生徒指導力を向上させるだけでなく、問題が発生しにくい学校風土、深刻化する前に解消できる学校体制を構築します。

※1 SC→スクールカウンセラー

※2 SSW→スクールソーシャルワーカー



チームで見る

実践例1 子供を多面的にとらえる力を磨く ～子供の状況把握について教職員全員で考える～

子供の状況を的確に把握するための方法や大切なポイントについて、全教職員で確認、検討を行っています。

- ①生活日記や観察等、複数の方法で日常的にとらえることの重要性を確認する。
- ②定期・不定期それぞれのアンケートのねらいを明確にした上で、項目や時期、方法等を見直すとともに、実施する際の留意点を確認する。
- ③年間行事計画を踏まえ、対象（児童生徒、保護者等）と実施時期を検討する。

このことを通して経験の浅い教員が子供の実態把握の在り方を理解し、多面的に子供理解に努めようとする姿が見られるようになってきています。

「子供を目の前にした常日頃の観察が重要であることや、アンケートのねらいやその意義が改めてわかりました。アンケート結果から見えてくることを他の先生と語り合うことも勉強になっています。」



チームで関わる

実践例2 子供への関わり方を学び合う ～教師の「書き言葉（評語）」で 子供を動かす～

子供との信頼関係を深めることをねらいとして、作品やノートに書く教師の言葉（評語）に着目した研究を行っています。「伸びしろコメント」と名付けて、子供一人一人の心に届くコメントを書くための技術を学び合っています。教師の願いを込めたコメントにより、教師に話しかけてくる子供が増えてきています。

「先輩の先生方のコメントを読ませていただくと、自分に足らなかった姿勢や言葉を見つけることができます。また、行事での子供の見方や励まし方を学ぶことができました。」



実践例3 共通理解を図り、教職員が同じ方針で指導する ～SC、SSW等の専門家を活用する～

校内のケース会議にSCやSSWに参加してもらい、専門的な立場からの助言を得ています。そのことにより、学年職員が子供や保護者への具体的な対応について、見通しをもって取り組むことができます。子供たちも学年の多くの先生に見守られているという安心感をもっています。

「SSWが、学年会で気にかけていた子の様子や家庭の状況を分かりやすく説明してくださったので、学年全体でその子のことを温かく見てもらえるようになりました。担任である自分と学年の先生との役割分担ができ、気持ちが楽になりました。」



チームでつなぐ

実践例4 子供の自発的な思いを学校全体に広げる ～生徒会によるいじめ防止の取組～

子供たちの「いじめのない学校をつくりたい」という思いを全校生徒に広げるため、「何がいじめになるのか」といったアンケートや議論等を通して、生徒同士が「いじめ」と真剣に向き合う機会をもっています。

「子供の思いを取組につなげる」「子供の力を信じて任せる」ことを合い言葉に、励ましや活動を認める言葉掛けを全教職員で行い、子供たちの取組を支援しています。子供同士が関わり合い、お互いの思いが形になっていく中で、いじめの問題を今まで以上に自分たち自身の問題としてとらえるようになってきています。

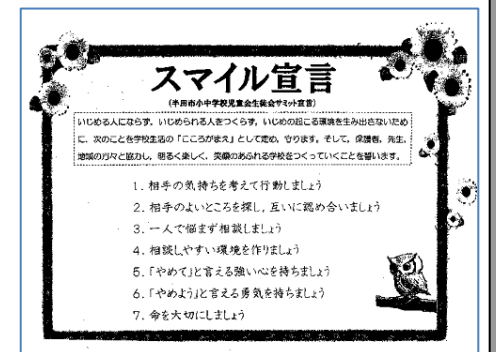
「担任だけでなく、多くの先生からも声を掛けてもらう機会が増えたことによって、子供たちの“自分たちの力でよりよい学校をつくる”という意欲が高まり、具体的な行動につながっています。」



“児童会・生徒会によるいじめ防止の 取組をさらに広げる”

この地域では、それぞれの学校での取組をもとにして、市内の全小中学校の児童会・生徒会役員が集まり、「いじめのない学校作り」について話し合いました。

その中で、子供たちの考えをまとめた「スマイル宣言」をつくり、自分たちの思いを大人たちに向けて発信しました。



実践例5 子供と親、中学生と小学生をつなげる ～いじめ問題をテーマにした親子読書と出前授業～

「いじめの問題について共に考える」をテーマに、親子読書を行いました。親子読書を通じて、生徒たちは我が子のことを真剣に考える親の思いに触れ、「一人一人がかけがえない存在であること」、「人を傷つけるいじめは絶対にいけないこと」という思いを強くしました。そして、生徒たちはこの思いを来年度後輩となる小学生にも伝えたいと考えました。生徒の思いを受け止めた教師は、小学校に働きかけ、中学生による道徳の出前授業を実現しました。

「親子でいじめについて考える貴重な機会となり、改めて子供をしっかりと見つめる親の責任を感じたという保護者の声が聞かれました。子供の成長を学校と家庭で支え合う雰囲気ができました。」

「小学生は、出前授業での関わりの中で、来年先輩となる中学生の優しい姿に接し、心配していた先輩との関係の不安が払拭され、安心感をもったようです。」

